

過剰代償行為としての『細雪』の言葉

野網 摩利子

要旨

『細雪』がなぜ過剰性にみちた語り口で語られるのかについて、テキストの動的な構造を分析して、解明する。小説の言葉がみずからの意味にそそのかされ、あたらしく言葉を生誕させる、こういった形式と内容とが相互に誘惑しあう複雑な連関は、なかなか論理的に言えないものだが、それが小説の実態に違いない。本稿は、饒舌な語りのしくみと理由とを明らかにしながら、このような連関作用およびその効果を探る。『細雪』の登場人物の場合、名前を持つ人間だからというだけでは主体といえない。欲望と結託した知が、登場人物のさまつな欠陥を、たえず、説明、解釈、解決しようとして言葉を差し込み、事を大げさにしていくといった連関があつてはじめて、欲望を受けて立つ主体や、欲望を追い回す主体ができる。言葉が注がれつづけなければ、この欲望駆り立てシステムは作動せず、欲望の関係式をとっていき存在してくる諸主体もまたない。はじめ虚像でしかない主体が、他者の欲望を刺激したり、また、刺激されたりすることで実像になる。その主体成立過程につきしたがうと同時に、刺激の資源ともなっているのが、『細雪』の語りである。それは、欲望を駆動し、体現し、代償する。ゆえに、過剰に行われなければならない。こういった、形式と内容とが入り組みあう小説の力の現実を考察する。

キーワード：過剰な語り，欲望，知，眼差し，主体，欠陥

1. 饒舌というシステム

『細雪』の、語らなくてもよいようなことまで語る饒舌ぶりは、誰も気づくとおりだが、ではなぜ、そのように、登場人物の心理の舞台裏や下書きといったことまでくどくど語られるのかを解明した研究はいまだない。『細雪』をエロティシズムや欲望といった語で説明しようとした研究なら少なからずある¹⁾。しかし、どれも、この過剰な言葉の運動と絡めての説明ではない。その異様さにどのようにすれば迫ることができるのか。『細雪』の言葉の原理を探りあてたい。

冒頭の場面で、幸子は、部屋へ入ってきた妙子の顔を鏡に認め、自分の顔の方を「他

人の顔のやうに」(上一)²⁾感じる。そして、自分を最も人に見せてしまう襟元の仕上げを妙子に頼む。ここには、たんに、他者の視線を介して自分を観るということが述べられているだけではない。鏡に照らしそびれ、擦り抜けてしまう自分の像を掴み取ってほしいと他者に依頼する出来事が記されているのである。

主要登場人物、蒔岡姉妹たちの像の鮮やかさは目を見張るところだが、それは、一人ひとりが緻密に書き込まれているためではなく、たがいの寄りかかりあいや探りあいが念入りに書かれるがゆえに、それらの像がいつきに立ち現れているための成果ではないだろうか。彼女たちの主体はいつもひび割れている。たとえば、「今迄幸子は、妙子のことで我慢のならないことがあると雪子に訴へ、雪子のことは妙子に訴へしてゐたので、平素は左程でもないけれども、かう云ふ時に妙子が家にゐないのは、此の上もなく淋しくもあり不便でもあつた」(下十七)とあるが、他者の欲望にどう応対するかということ自体が、姉妹間での対他関係のやりとりをもとに決められていく。自分の像をまず姉妹間で置き放ち、他者からの欲望の強度を吟味する。しかも、その検討はひととおりで済むことがない。

彼女たちの心理の過程では、さまざまな決定のやり直しが飽きもせず繰り返される。とくに、四姉妹の次女、幸子は、いつも、ほかの姉妹が引き起こしたことの対処に悩んでいる。たとえば、彼女は、妙子が婦人洋服店の資本金を得るために東京の本家に直談判しに行くというのを聞いて、妙子への自分の対処が姉夫婦からどう見られるかを気にする。一方で、板倉の関与をいう雪子の意見に同意する。他方、妙子の志も思われる。だが、姉夫婦と対峙できないと思う。この心理の右往左往に語りはとことんつきあい、そして、テキストは裏地を何枚も重ねてまとうかのようなのだ。この、登場人物の心理のはだえにまつわり、張りつく語りの様態のわけを明らかにしたい。

2. 知の乗り入れ

他者の欲望への対応を姉妹間の対他関係で練りあげる主体を前節で確認したが、では、その欲望はどのように言葉を組織しているだろうか。『細雪』の場合、他者の欲望がその人の眼差しから窺えるというような説明ではこの複雑さを捉えきれない。冒頭の場面に見られるように、たしかに、他者の眼差しはその欲望の形象化なのだが、この小説の運びを見れば、さかんな眼差しの動きに沿って、小説の言葉が増えていく印象がある。たとえば、鏡だけで用が足せず、他者の欲望を知らせる機能において鏡より勝る妹の眼差しを求め、鏡を見る。すると、それに答える言葉が妹から発せられる。欲望という見えないものを読み解き、対処する言葉が求められており、それを登場人物たちの言葉が引き受けて答える場合もあり、また、語りが引き受ける場合もある。本稿では、こういった欲望を追いかけて掴もうとする言葉の動きを、知と呼ぶことにする。そして、テキストにおいて、眼差しはつねに知を求め、運ぶ役割をしている。こうして、眼差しや欲

望とともに、登場人物みずから、知と認める言葉がテキストに増えていつている。この連関を考察し、登場人物が心理主体として成立する過程を導き出していきたい。

知と欲望と眼差しとの関係は、登場人物にどのような直接的間接的作用をもたらしているだろうか。桑山邸音楽会に向かう三姉妹の描写は、「その三人が揃って自動車からこぼれ出て阪急のホームを駆け上るところを、居合す人々は皆振り返って眼を敬てた。(…) 雪子は自分の眞向うに腰かけてゐる中學生が、含羞みながら俯向いた途端に、見る―顔を眞つ赧にして燃えるやうに上氣して行くのに心づいた」(上七) とある。居合わす人々の欲望を載せた眼差しとともに、テキストの言葉が増えていくが、その最中はまだ、一連の文に終わりの予想がつかない。しかし、欲望と眼差しとが累積したすえ、それに感じたかのような中学生の欲望と俯く視線とにひとまず取り、その状況を欲望刺激の張本人が目で確認する。こうしてやっと、一連の文全体が「心づいた」という心理でくくられるのである。

注意したいのは、さきほど心理主体としての登場人物と述べたが、雪子なら雪子の心理は、つぎのように成立しているということである。多数の欲望が眼差しとともに流れ、そのうねりに巻きこまれた中学生が、欲望を知るという立場を選択した途端、雪子が刺激者として現前する。そして、その全体を刺激者として眼差しはじめて、彼女は心理主体となるのである。

まるで、眼差しのうねりが、中学生に自身の欲望に気づくということを教えているかのようなのである。そして、だれかれに、見る欲望が振る舞われたということを知る必要が雪子にはあったかのようなのである。つまり、欲望は、眼差しに乗って、他者間における自身の位置に気づくという過程をテキストに書き込んでいく。これが、書き順までもなぞっているかのような、特殊な語りの行われる理由の一つである。

同じく、欲望、眼差し、知、心理主体の関係の考察のために、三姉妹、悦子、ローゼマリーが蜂から逃げ回った場面を見ていきたい。「『さうかて、笑ひごとやあれへん、さつきはほんまに恐かつたわ』／雪子がまだ息をはあ―弾ませて、青ざめた顔に無理に笑ひを浮かべながら云つた。彼女の脚氣の心臓がドキドキ動悸を搏つてゐるのが、ジョウゼットの服の上から透いて見えた」(中十一) とあるが、ここでは、蜂を追いかけて、視点がずれていったすえいつのまにか、その眼差しが欲望を獲得し、蜂などどうでもよくなっている。そして、最後の一文では、雪子の心臓を覗き込もうとする者がいる。その主体が誰か、はっきりしない。はっきりしないがゆえに、誰もがあてはまることになり、読者を含めて、ジョウゼットの服を透かして雪子を見る者に仕立てられる。つまり、眼差しが動くにつれて、欲望が動き出し、知の主体も形成され、言葉が充満していく。ここにも、縷々語られていかなければならない理由が見出せる。この語りは、対他的に形成される眼差し、欲望、知をなめとって力を得るのである。もし、短文の連続だったら、この累積はうまくいかなかったに違いない。またそれは、眼差し、欲望、知の乗り入れ

る現場、書き込まれる現場に主体が生起し、そういった注ぎ込みが、語りの流れで表されることも示していよう。

では、そのような主体が言葉をやりとりする構造はどうなっているのだろうか。それを次節で考察する。

3. 言葉の増産体制

『細雪』のおもしろさの一つに、登場する人々のおせっかいぶりがある。自分では品よいつもりのおしゃべりがそれだけで小説になるとも思えないのだが、それが、どういしくみでこの小説では成功しているのだろうか。

おせっかいとは、自分の知があなたの欠陥点を補うに値すると思うから押し付けるといった恩着せがましい側面を持つだろう。このテキストにおいて全登場人物から注視される欠陥とは、もちろん、雪子の結婚相手がいまだに不在であることだが、雪子の縁談はいつでも情報不足のところから始まり、そこに向かって一見好意的に知が寄せられる。井谷のけしかけ、幸子貞之助夫婦の取り繕い、本家からの情報提供、といった流れが毎度繰り返される。それは、めかしこんでフォームに駆け上ったり、蜂から逃げ回ったりしながら、眼差しと欲望とが累積していく動きと同じなのだが、そこは、彼女たちの言葉も関わっているので、より込み入っている。

ある縁談の不成立のあとに井谷によって口にされる「此のお埋め合せ」（上十五）という言葉があるが、それは、雪子にない夫の座を穴と見なす言い回しである。雪子の周囲の登場人物は、その雪子の穴を覗きこみ、とりあえずそこに自分の言葉をかいくぐらせることで、おのおのの欲望を一時的に満足させている。

欲望がいつまでも稼働しつづけるためには、おそらくこの一時的にしか満足を得られないという点が重要なのである。差し向ける言葉の不十分さがいつそう多くの言葉の呼び水となる。そして、入ってきた言葉同士が共鳴してさらに増幅する。たとえば、雪子の眼の縁のシミにたいして、他の登場人物たちは自分の言葉でその欠陥を説明、解釈、解決しようとすることに余念がない。曰く、結婚生活の夜がないので女性ホルモンが刺激されていないのだ、曰く、シミのせいで縁談がうまくゆかないのだ、曰く、だから注射が必要なのだといった具合である。周囲の登場人物のみならず、読者である研究者もまた、そのシミを好餌にしている³⁾。縁談の解決を早く見るべき曇りなき雪子に一点の「暗影」（上十四）がある。そのおかげで、周囲は自他の欲望を追い回して言葉を多発できる。このように、欲望駆り立てシステムが作動している。

そのシステムはいったい何のために作動するのか。澤崎と雪子との見合いの場で、「明かに澤崎には雪子がお氣に召さないのに違ひなく、そして、その由つて来る主な原因はと云へば、どうも雪子の左の眼の縁にあるのではないかと、推量された」（下五）と幸子の心理が語られる。澤崎が雪子のシミを気にしたという事実はじつはどこにもなく、

あるのは幸子の推量だけである。雪子のシミは、ここにおいて、幸子の漠とした心配の格好の捌け口に過ぎない⁴⁾。つまり、雪子のシミを欠陥とみなすことによって始めて、幸子は小説内で心理を持ちえているのである。ここで、『細雪』の仰々しい語り口の理由がもう一つ解けてくる。語りの過剰さは、ある欠陥にたえず言葉が差し込まれ、通り抜けていることの証しなのだ。しかも、そうしつづけなければ、この小説にそもそも心理主体が成り立たないのである。だから、つねに言葉数が多い。欲望駆り立てシステムが止まるようなら、この小説の言葉も止まることになる。

最終的に雪子と御牧との縁談がまとまっても、雪子は、「此れ迄に運んでくれた人の親切を感謝するやうな言葉などは、間違つても洩らすことではなかつた」(下三十四)とある。それは、結婚相手が見つからないという雪子の欠陥を気にかける人物が彼女に寄せていたのは、「親切」などではなく、親切を装った「欲望」だったからにはほかならない。シミ一つで長々、喋々する言葉の群、その回転をどうしても止めるわけにいかない。なぜなら、登場人物間にあり、登場人物をからめとる、欲望の流れは、言葉を乗り物とすることで作られ、保たれるからだ。このテキストで、言葉そのものがひた走るように見える理由はここにある。

4. 欲望の関係式

前節に確認した欲望駆り立てシステムが、いかに、愛らしきものと連関しているか、その考察を本節で行う。二節で考察した眼差しの問題を再導入しよう。眼差しが動くにつれ、欲望が知の主体を形成していくという問題である。幸子と貞之助の心理に即した所で、雪子の見合い話の起こるたびに、これまでの見合い話が思いおこされ、それらの共通点が数えあげられる。まず、この知を装う言葉の質を確かめたい。

過去の教訓を今後に活かすという名目で、幸子の華やかさが雪子の影を薄くすることについて検討される。夫貞之助への「あたしが一緒やつたら雪子ちゃんの邪魔することになるねんて」(上九)という幸子の言葉や、それにうなづく貞之助の喜びの言葉は、見合い話ごとに何度でも繰り返される。この反復は何を意味するのか。

幸子は、雪子の見合いがあるがゆえに、自分自身の魅力を夫から、また、雪子の縁談相手の仮想の目から確認できる。雪子の欠陥についてあれこれ熱心に検討するのは、彼女の欠陥という穴を通せば、自分の魅力がますます拡大されて他者の目に映るという実感を伴っていたからだろう。見逃したくないのは、ここにある知の二重性である。一見、雪子と雪子の相手との欲望を考えているようで、じつは、それらを利用して、想定する多数の他者と自分の欲望とを追いまわす知の喜びがここにある。このために幸子にはいつでも雪子が必要であり、彼女は何度でもその快感を味わいたかった。これが幸子の欲望と知の実態であり、その反復に語りはつきあいつづけるのだ。

そして、雪子の見合いといえば、毎回、「土壇場まで来て断る」、「いつも何か動きの

取れない故障が起つてどうしても断るやうな羽目になる」、「突き詰めて行くと、さう云ふ變に暗黒なものに打つかる」、「ギリギリの所へ來て断る」(上十四)というパターンをとる。この例外すらない繰り返しは、フロイトの言う、重複する錯誤行為を疑うべきだろう⁵⁾。背後には、無意識の欲望が働いているにちがいない。

幸子は、雪子の縁談がうまくいかなくなりそうなきいつでも、夫に泣きつき、貞之助は善後策をかがいしく考える。ふたりは雪子の縁談がうまくいかないときにこそ、愛を確認しあえる。ここには、雪子の欠陥を通して、自分の欲望を自分のパートナーへ届けるといふ彼らの愛のあり方が如実に現れている。愛の対象であるはずの相手の人格ですら、雪子の欠陥を通してやっと現れる。幸子が、雪子に反実仮想を抱きながら貞之助に愛情を覚える様を見てみよう。

夫の顔を見た途端に黙つてみられないやうになつたのであるが、(…)自分がみたら先方の申込みを應諾させることは出来ない迄も、せめて人並な挨拶ぐらゐはさせたに違ひないものを。……さうしたら恐らく此の縁談は順潮に運んだであらうものを。……そして近い将来には婚約が整つたかも知れないのに。(…)幸子は、自分の方があべこべに宥められて見ると、夫に濟まないと云ふ氣持がひとしほ強く湧いて來た(…) (下十七)

貞之助の妻への甲斐性は雪子の欠陥を通して現れるし、幸子の夫への感謝もまた、雪子の欠陥を引き合いに出さなければならない。このように見てくれば、見合いのあるたびに前の見合い話の苦勞がことごとしく引かれる理由は、幸子貞之助夫婦の愛の歴史の回顧、愛の存続の確認のためであつたと分かる。注ぎ込まれる知が独善的に見えるのは、それが、他者から見られる快感を求め、得るための利己的な愛の道具にほかならないからだ。

言葉が欲望のうしろをひた走っているとすれば、言葉の反復も、欲望の回路に敷かれた出来事であり、偶然であるはずがない。雪子の縁談や見合いの日に必ず起る悪い前兆もまた、奥に欲望の問題が見え隠れする。多く焦点化されるのは幸子なわけで、すると、こういった反復はつぎのことを暴露する。幸子は意識上では「何事もなければよいが」(下二)と懸念するが、無意識では、縁談の進行途中で「不吉なことや變つたこと」(下二)を作っているといえるのではないだろうか。幸子の無意識は、雪子の縁談を破談に導くことも辞さない。なぜなら、その騒ぎから雪子との違いを他者から認められ、夫との交わりを持てるのが毎回の楽しみなのだから。たとえば、電話に出させたら爛の立つかばそい声しか出せない雪子が、幸子の不在のために橋寺からの電話に出ることを余儀なくされたのは、一見偶然のようでも、じつは、幸子の未必の故意であつたといつてよい。

幸子にとって、雪子のそういった欠陥はゴミ箱のように便利だつた⁶⁾。雪子と野村と

の見合いが進められる最中に、またしても差し支えが生じる。それは、姪の病氣と幸子の流産である。流産は幸子自身の過失であるはずなのに、それを幸子は、雪子の運勢に巻きこまれているせいだと意味付ける。

これ迄にも雪子の見合ひと云ふと、故障が起つて一遍にすら――と運ばないことが多かつたので、今度もそれを豫期すると云つては可笑しいけれども、何か、そんなやうなことがなければよいかと案じてみた矢先に、先づ本家の姪の病氣と云ふ邪魔が這入り、それが濟んだと思つたら、今度は流産と云ふ不吉な事件に打つかつたところから、幸子は自分たち迄が、繋がる縁で妹に纏はる運勢の中へ巻き込まれたやうな、薄氣味の悪い心持もせざるを得なかつたのであるが、(...) (上二十七)

このとき、雪子は、幸子にとって、過失のみそぎの場になっている。幸子がみずからの呵責に面と向かわずにすんでいるのは、雪子の欠陥性に全責任を押しつけていられるからである。

なお、本家の、鶴子辰雄夫婦も、幸子貞之助夫婦と似た、欲望、眼差し、言葉の反復運動下にある。鶴子の幸子宛の手紙の話題はほぼ毎回、まとまらない雪子の縁談に関してだが、そのときいつも鶴子は「兄さんは」と主文を書き出し、辰雄の意向すなわち自分の意向であるかのように書く。そこでは、辰雄と鶴子とが、欠陥商品としての雪子を通じて、幸子夫婦の眼差しを感じつつ、結ばれている。

このように、『細雪』の言葉のくぐさしさには訳があつて、複雑な欲望の関係式を立体的にしあげるための、欠くことのできない性質なのであつた。

5. 主体の成立

さらに、テキスト内の主体の成立を、こういう過剰な言葉の性質とともに見ていきたい。雪子のほかに、『細雪』にはもうひとつ追いかけてある欠陥商品があり、それは、四女、妙子である。

彼女の生活は当初から嘘で固められていて、そのうち彼女自身もどれが本物の自分だか分からなくなつてきている。奥畑、板倉、三好といった男たちとのやりとりは、彼女自身手に負いかねる、ほぐしがたい様相になっている。彼女は、そのこんがらがった生活の一部をかいま見させることによって、幸子、雪子、貞之助の同情を得ようとする。彼女のなすこととは、自分の分身をなげうちつつ、さあ、あなたがたはほんとうに私を失つてもいいの？ 私を失うことができるの？ といったことだと言つてよいだろう。これは、自分の欠陥を謎かけのルアーにして、他者の欲望を釣ろうとする、いわば遊戯にほかならない。

こういった妙子のふるまいは、他者の眼差し、欲望、知を意識的に動かすことを企図

している。妙子に関する情報は、雪子の見合い相手に関する情報と同じく、あとからつぎつぎに出てくる。雪子の場合と違って、妙子の場合にはそれが妙子自身によって操作されている。中身をすこしずつ開示することで、他者の眼差しを操作しつつ、他者の欲望と知とを誘発する。奥畑などは、妙子のその戦術にみごとに騙されて、「探偵的興味を抱くやうになつてゐた」(下二十一)とまでになる。

途切れる妙子像に向かって、他者の欲望と知とはどのようにおびき寄せられ、その欠陥に入りこんでいくのだろうか。奥畑と板倉との関係について、妙子が幸子に告白する場面を見てみたい。妙子は、「だん――口が重く」なり、幸子によく伝わるのは、妙子の部分像でしかない。それに幸子が言葉を足して「補綴と解釋と」(中二十五)を施し、やっと、妙子の行動がテキストで位置を確保している。妙子をめぐって、知を自認する言葉がおびき寄せられ、うごめき、静止もままならないさまが見出せる。

前節では、雪子の欠陥点を介してなされる他者同士の欲望の交歓を指摘した。同様に、他者に部分像を示しつつ、全体像を隠す妙子の不明点もまた、他者の言葉が飛び交う地点である。多くの場合、使用人のお春から、妙子の欲望を部分的に明らかにする知が引き出される。「幸子はお春がまだ何か知つてゐさうな気がしたので、(…)お春を應接間に呼び入れてあとを聞いた。と、お春は、もう外に存じませんけれど、…………と云ひながら又こんなことを話した」(下九)とあるが、お春から提供される断片情報が刺激になり、幸子、貞之助、雪子の言葉がますます盛んになる。

いくら多くの情報を把握し、検討したところで、妙子についての認識不足が解消されるわけでない。しかし、尻尾を見せながら逃げる妙子を追いかけて、得体の知れない彼女の欲望の捕捉のために自分たちの知を走らせることに彼らの無意識が興じているのであろう。妙子の場合、いまここにいない自分を他者の欲望に追いかけさせるということをかなり意識的に行っている。蒔岡家の欲望は、妙子の戦略によって、いつのまにか遠くにまで触手を伸ばし、欲望にまみれた像を捕まえるための知を身もとに集めてくることになる。

幸子が、赤痢にかかった妙子の費用について「雪子の意見」を求めると、雪子は「お春どんはあの婆やさんと始終話し合つてゐたやうであるから、お春どんに聞いたらきつと何か分ることがあるに違ひない」と言う。そこで、幸子はお春に「何かあの婆やさんから聞いてゐることはないか」(下二十三)と訊く。妙子自身はその費用を自分の貯金で賄つたと言うわけだが、真偽が疑われ、本物の妙子を追跡するルートが敷かれる。幸子から雪子へ、お春から婆やへというものだ。このルートを思わせぶりに逃げるのは妙子であり、それを得々と追いかけるのは幸子や雪子である。

こうして順々に敷かれていく回路をつたつて欲望が動き、無駄口が叩かれ、そして、そこここに心理の主体ができていく。できた主体がまた、それらの運動を加速化させることは言うまでもない。こういった軌跡すべてを辿るのは語りである。すると、その語

りは、はじめ虚像でしかない主体が、他者の欲望を刺激することで実像になる逐一を追っているといえる⁷⁾。

鏡も映さないような欠陥に、他者の眼差しが集まる。いない夫という穴に知が集合する。取るにたらない欠陥をまるで意味があるかのように見なすことそれ自体、むしろ意味を産出する作用だ。蜂から逃げまわったり、また、自分の分身を抛ちつつ逃げたりする動きこそ、言葉と呼び寄せる。欠陥はつぎつぎと思わせぶりにでき、欲望と知とが注ぎ込まれ、言葉数はいくらあっても足りない。ひきもきらず欠陥が言葉に置き換えられ、誰かの欲望にまみれた言葉が累積するとき、これらを受けて立つ主体がそこここで生まれるというしくみができている。

このように、欲望にそそのかされ、言葉が動き、主体ができるがゆえに、テキストにおいて主体はかくも生々しい。『細雪』の語りが登場人物のはだえにまつわりつくようなのは、他でもない、その言葉こそ、登場人物の欲望を代償し、さまつな欠陥を主体の核に変えていくからなのだ。

6. 代償する言葉

雪子や妙子の欠陥に己むことなく知が注ぎこまれ、どの知もその欠陥の穴にできるだけ長く留まろうとしている。そういったことを全部さらっていく『細雪』の語りは、したがって、まどろっこしい。

それらはたえず競合しながら、他のものに置き換えられつつ、移動する。むろん、小説であるかぎりみな言葉で表されるのだが、その競合が追いかけてこのような様相を呈している。それは、眼差し、欲望、知のネットワークの性質による。それらはいつでも幾人もの他者による眼差し、欲望、知の投げかけを想定し、潜在的に絡みあって動きはじめる。この競合関係を、呼びかけ関係と言ってもいいだろう。テキストの言葉ひとつひとつがこのネットワークにおいて他の言葉を搦めとり、搦めとられながら、呼びかけあい、生長を繰り返す⁸⁾。論証してきたように、そういった相互乗り入れなしには、蔭岡姉妹の主体は成立しない。有名なつぎのシーンはそのようなものとして読み解かれる。

お互に、螢に釣られてつい離れ〜になるので、始終呼び合つてみないと、闇に取り残されてしまふ心配があつた。幸子はいつか雪子と二人だけになつてみたが、向う岸でこいちやん〜と云つてゐる悦子の聲と、それに答へる妙子の聲がとぎれ〜に、……………少し風が出て來たので、……………聞えたり消えたりした。(…)
……………その、川の向うから風に傳はつて來る聲が、今も幸子の耳に聞える。(下四)

声が交錯するこのシーンは、闇のなかで相手をつかもうとしている。と同時に、それは自分をつかもうとする行為である。自分を呼ぶ他者の声をつかめないと、主体はとた

んに危うくなる。とぎれそうになる声がなんとか継がれる。対他関係で位置を確保しながら、暗やみを移動し、行く道を探す。それは、自分の内実の欠陥を呼びかけられる言葉で補おうとするかのようなのではないか。欠陥は、闇によって、鏡によって、あるいは、人造の闇によって、人造の鏡によって作り上げられる。そもそもひびわられていて、そして修復され、いちいちまたひびわれる奇妙なネットワークは、主体の核をつねに他者から照らしてもらうために欠かせない。この欲望駆り立てシステムはひとまとまりの文でいっきに誕生する⁹⁾。本稿はそのことを示した。

『細雪』の語りは、肥沃な言葉を利用しなければ動けない眼差し、欲望、知に資するために過剰なのであった。そして、その語りは、このシステムの具現化にほかならない。つまり、資源であり、代償行為でもあるのがこの語りの存在様態だ。いわば、言葉の細胞分裂による増殖であり、どちらがどちらの結果かあるいは原因かを言うことはできない。しかし、この複雑怪奇な文体に踏みこまないかぎり、どんな明晰さもこのテキストを説明しきれないだろう¹⁰⁾。本稿は、『細雪』の語りが、みずからの増殖にどんだんうるおい、欲望にとことんつきあう生きた組織であることを述べた。

註

- 1) 『細雪』をエロティシズムや欲望という用語で評した研究として、笠原伸夫『谷崎潤一郎——宿命のエロス』（冬樹社、一九八〇年）、細江光『谷崎潤一郎深層のレトリック』（和泉書院、二〇〇四年）がある。とくに細江のものは綿密な調査の集大成であり、最新の谷崎研究である。それは、フロイト理論の一部を援用して、作家谷崎の性向を診断し、作品にその現われを見ている。本稿はそれに対して、欲望を測る精神分析学の方法をテキストの言語に導入し、その動的システムを探る。
- 2) 『細雪』上巻は「中央公論」（一九四三年一月、三月）、『細雪上巻』（私家版、一九四四年七月）、中巻は『細雪中巻』（中央公論社、一九四七年二月）、下巻は「婦人公論」（一九四七年三月—十月）に発表された。本文は『谷崎潤一郎全集第十五巻』（中央公論社、一九八二年）より引用する。なお、章番号を付し、省略は（…）で、改行は／で示した。
- 3) 野口武彦は、シミが、「生の刻み目」、「女の生理的時間」を集約していると読む（「谷崎潤一郎論」「中央公論」一九七三年八月）。清水良典は、「性の紋章」（「文と陰翳——『細雪』と近代の闘争」（「群像」一九九四年十一月）という。丸川哲史は、「女性の身体性、特に性をめぐる重要なメタファー」と仮定する（『『細雪』試論」「群像」一九九七年六月）。渡部直己は、穢れと遅れの連関性を論じて、シミを「遅れを介して消しがたい濁点」とする（『『細雪』と八月十五日」「新潮」一九八九年一月、『谷崎潤一郎——擬態の誘惑』新潮社、一九九二年所収）。村瀬士朗は、「ホルモンバランスの崩れ」によるシミと、静岡姉妹の注射をしあう「結婚の代行行為」との連関を指摘する（「代謝する身体の物語——生命現象としての『細雪』」シンポジウム『細雪』——病いの時空——「国語国文研究」

- 一九九〇年十二月)。
- 4) じっさい、橋寺との縁談では、雪子の「眼の縁の翳り」は「目立たなかつた」(下十五)が、破談する。
 - 5) フロイトは、「日常生活の精神病理学」(原著一九〇一年)で、偶発的な行為や錯誤行為には、意識されない動機があることを説明している(『フロイト著作集』4、高橋義孝訳、人文書院、一九七〇年所収)。
 - 6) 第一節で引用した箇所だが、「妙子のことで我慢のならないことがあると雪子に訴へ、雪子のことは妙子に訴へしてゐた」(下十七)とあるとおり、ふたりの妹の欠陥ぶりへの不満を、片方をゴミ箱として使えば、幸子は自分の責任を回避してさばくことができた。御牧と雪子との縁談のさい、いつものように妙子が「躓き」となって「破れる」のかと「憎らしく」(下三十二)思われるのだが、じっさいはこの縁談はまとまる。この例からも、ふたりの欠陥が都合よく利用されていたことが分かる。
 - 7) 中村光夫が「谷崎の文体が心理の微妙な色調を描くよりその肉太の絢爛さで肉体の外形をたどることに特色を持つ」(『谷崎潤一郎論』河出書房、一九五二年)と評している。それに対し、本稿は、欲望を乗せて流れ、心理主体の成立諸相をたどる文体を解明している。
 - 8) 野口武彦は、中村真一郎を受けて、「客観的な記述に終始した『細雪』の話法」を指摘し、「登場人物が自分自身の問題を小説的生として展開する」ことを言う(前掲論文)。また、清水良典は、「作品の語りはその肉声が乗り移ったミメシスの文体であろうとしているゆえに、むしろ好んで選ばれている」とし、それは「さまざまな複合的な像」を「文脈に合わせて変幻」させるためであると論じる(前掲論文)。
 - 9) 長谷川三千子が、「完全な個に閉じこもるとき心理が現れるのであって、『細雪』の「人々にはいっさい『心理』はない」(「やまところと『細雪』」「海」一九八一年二月、『からごころ 日本精神の逆説』中央公論社、一九八六年所収)と述べている。この見解には拙論と通底するものがある。本稿は、個に閉じこもるのではない心理と主体の言語的在り方を『細雪』から見いだす試みである。
 - 10) 小林秀雄は、谷崎の文章について、「肉眼が物のかたちを余す所なく舐め尽す不屈な執拗性の裡に陶醉しようとする」(「谷崎潤一郎」「中央公論」一九三一年四月)と述べる。佐藤春夫は『細雪』について「舌なめづりするやうに書いてゐる」(「谷崎文学の代表作『細雪』」『日本文学全集 16 谷崎潤一郎集二』付録月報、新潮社、一九五九年、『定本佐藤春夫全集第 26 巻』臨川書店、二〇〇〇年所収)と述べる。そういった『細雪』の文体の原理を明らかにした研究はなかつたので、それを行った。